



## 目次

---

### 基調講演 **日本の技術がどう活かされているか** 9

文化財保存修復学会会長 / 独立行政法人国立博物館・九州国立博物館(仮称) 三輪 嘉六  
文化財保存修復学会の沿革と目標 / 『古社寺保存法』の理念 / 可逆性とオーセンティシティ

---

### 特別講演：日本に期待されるもの **世界の文化遺産の保護** 13

早稲田大学 吉村 作治

はじめに：考古学との出会い / デジタル・アーカイブの重要性 / 日本に期待されていること /  
クフ王、第2の太陽の船の保存状況 / エジプトでの活動地点 /  
アメンヘテブ 世の王墓の保存修復作業 / アブ・シール南丘陵遺跡 / 出土遺物をどう保存するか /  
今日の環境変化から文化財をどう守るか / おわりに

---

### 和紙と刷毛による貢献 **世界に広がる装潢技術による修復技法** 27

昭和女子大学 増田 勝彦

イクロムを中心に行われた和紙と装潢技術に関する研修 / 東京国立文化財研究所による研修 /  
国際文化財保存学会での発表にみる日本技術関連情報 / 海外における装潢技術と和紙の利用例

---

### インドネシアの木造建造物保護をめぐる **日本の建造物保存技術を活かす** 39

文化庁 大和 智

はじめに：遺産保護におけるわが国の国際交流 / アジア諸国文化財の保存修復等協力事業の概要 /  
インドネシアとの交流事業 / 展開：スンバウ島旧王宮の保存修理 /  
遺産保護に日本はなにができるか、課題、展望

---

### なぜ日本が石造建造物の修復か **アンコール遺跡の保存修復** 53

早稲田大学 中川 武

アンコール遺跡の保存修復事業の基本姿勢 / アンコール遺跡の特徴 /  
バイヨンの北経蔵の保存修復の意味 / バイヨン北経蔵の版築土層 /  
保存修復に活かされた日本独自の技術 / 保存修復の基本は総合力

---

#### 「文化財の保存と修復」公開シンポジウム実行委員会

委員長：三輪 嘉六 副委員長：西浦 忠輝

委員：福業 政満、川口 法男、杉山 真紀子、村上 隆、村田 忠繁

補佐委員：秋山 純子、建石 徹

---

シルクロードに眠る都をよみがえらせる **交河故城の保存修復** 67

(株)文化財保存計画協会 矢野 和之

交河故城の沿革 / 都市の構造 / 経過 / 交河故城の現状 / 保存整備の方針 /  
実施工事の概要 / 日本の技術や考え方を活かした調査および工事

---

地域に根づく技術の開発と応用 **ガンダーラ仏教寺院遺跡の保存** 83

独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所 西浦 忠輝

ラニガト遺跡とその劣化、保存対策 / 現地実験施工 / 改良施工 /  
改良施工3年半後の状態 / おわりに

---

うつぶせの石像を起こす **イースター島モアイ像の保存修復** 93

独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 沢田 正昭

うつぶせのモアイ像 / 修理に日本の技術 / 国際交流と保存哲学 /  
曝露試験 / 保存材料の評価方法

---

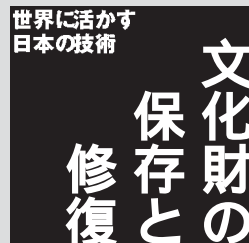
パネルディスカッション **世界の文化遺産の保存に日本の技術をどう活かすべきか** 101

コーディネーター 三輪 嘉六

修理・修復の倫理規定とは / 倫理とは獲得すべき目標 / 木造建造物の倫理規定とは /  
紙類の修復における倫理規定 / 保存修復の成果の評価法 / 修復工事報告書の作成を通じての貢献を /  
具体的な事業より交流を / 日本の装演技術の普及 / 定性的な評価と定量的な評価 /  
パートナーをひとり見つける / 地元の伝統技術をどう活かすか / 修復工事を通じて蘇る伝統技術 /  
伝統技術のみなおしを / 文化財の保存伝統技術を残す / 木造建造物の生物劣化の対策 / まとめ

---

CONTENTS



世界に活かす  
日本の技術

文化財の  
保存と  
修復

うつぶせの石像を起こす

イースター  
モアイ像の  
保存修復  
の島



沢田 正昭

独立行政法人文化財研究所  
奈良文化財研究所  
埋蔵文化財センター長  
京都大学大学院  
人間・環境学研究科教授

昭和44年東京芸術大学大学院  
美術研究科修士課程(保存科学  
専攻)修了。奈良国立文化財研  
究所文部技官、同センター研  
究指導部長を経て、平成11年  
より現職。

専門は文化財の保存科学。現  
在は、中国古墳壁画および塑  
像の分析と保存修復にも関心  
をもつ。

## うつぶせのモアイ像

太平洋に浮かぶ楽園の島、タヒチとチリ国・サンチャゴとの間のほぼ真ん中にイースター島があります。この島に12年ほど前からでかけており、世界文化遺産に登録されたモアイ石像の保存修復に携わってきました。

小豆島ほどの大きさのイースター島には、唯一のラノラクという火山性の凝灰岩からなる山があります。この山から800体とも1,000体ともいわれているモアイ石像を切りだしていました。この山のすそ野には今もたくさんのモアイ像が点在しており、制作途上のモアイ像や搬出の途中で放置したままのものなど、あたかも18世紀の時計が止まったような光景を呈しています(図1)。ラノラクの火口の周りにも数多くの石像が点在しています。モアイ像は山の斜

左上:

図1 山すそに点在するモアイ像  
(口絵カラー参照)

右上:

図2 制作途上のモアイ像

下:

図3 うつぶせに倒れたモアイ像



面に仰向けの状態で彫りだされていました(図2)。

1955年に、ノルウェーの探検家トール・ヘイエルダールが考古学者を連れてこの島を訪れた際、石像の多くはうつぶせの状態で見つかりましたと報告しています。その報告どおり、ほとんどの石像はうつぶせの状態になっています(図3)。その理由として、部族間の争いでお互いの象徴である偶像を倒したため、ヨーロッパ人たちが破壊したためなどといわれています。人為的に倒した石像であれば、そこに何らかの歴史的な意味があるので、むやみに再起立させることは必ずしも好ましいことではありません。私どもが修理した、島で最大のアフ・トンガリキ遺跡は、1960年に発生したチリ地震による津波でことごとく破壊された遺跡です。

### 修理に日本の技術

この遺跡では、まず、全容を確認するためにアメリカ・日本・チリの考古学者が合同発掘調査を行いました。遺跡は大きく2つの時期に分けられることを確認し、比較的古い時期の遺跡を復元することにしました。発掘調査では初期の古いタイプのモアイ像の頭部や神を象徴する石造品なども多数発見されました(図4)。

アフ・トンガリキ遺跡のモアイ像の多くは、倒れたときの衝撃で首の部分から破断していました。まず、クレーンを使って胴体を起こし、さらに頭部を吊りあげたままの状態で見合わせるようになりました。10トンもの石像を宙吊りのままで接合部をあわせるのは容易ではありません(図5)。また、破断面はすでに風化して摩耗しており、接合面には微妙に隙間ができていました。その隙間



図4 発見された古い時期のモアイ像



図5 宙吊り状態での接合作業(口絵カラー参照)